# 第2部　各分野での震災後の取り組み
# 第5章　女性の活躍

神田より子

## はじめに

東日本大震災直後から地域の中でリーダーシップを発揮し、住民を動員して、被災者の方々のために力を尽くしてきた女性達に焦点を当ててみてゆきたい。ここでは婦人防火クラブ、婦人消防協力隊、女性消防団員、保健師の方々を対象にする。彼女たちも被災者であり、震災という未知の領域の災難に出会いながら、これまでの経験を生かしながら活動してきた女性達だ。

こうした女性の活躍について記録した資料として『いわて消防物語―纏に生きる人たち―』(財)岩手県消防協会監修「いわて消防物語」刊行委員会　昭和61年）がある。これは女性に特化した内容ではないが、岩手県内各地の婦人消防協力隊や婦人防火クラブ、及びその前身の組織について述べられている数少ない資料である。以下では本報告書の主旨に関連する地域に焦点を当てて、現在活躍している方々の成り立ちを描いてゆく。

田老町（現宮古市田老）では度重なる災害に見舞われ、そのため田老町消防団は戦時中から婦人消防協力隊の前身である婦人補助隊を設けた。はじめは30代から40代の主婦30人で組織され、火災の際に炊き出しやバケツリレーによる初期消火に活躍した。その後、女子青年会のメンバーを中心に若返りをはかり、計90人の田老町消防団婦人補助隊を結成、そろいの半纏を着用して活動を展開した。新里村（現宮古市新里）では婦人消防協力隊が第1から第6協力隊まで組織され、隊員は160名、出初め式や春秋の消防演習に参加して消火訓練を積んでいる。川井村（現宮古市川井）では、昭和54年に川内地区に婦人消防協力隊が設けられ、当初は144人だったが、現在は20人ほどが活躍している。重茂村（現宮古市重茂）では大正末に重茂、音部、鵜磯、千鶏、の各地区に全戸加入の自警団が設けられた。また昭和初期、宮古地方でただ1か所婦人火防組合が組織されている。婦人消防については岩手県が昭和2年に婦人火防組合の準則を示し、宮古地方では重茂村婦人火防組合が存在した。この流れを受けて、重茂漁協婦人部の中に元村、南区、音部、北区の各婦人防火クラブが組織され、婦人部の消防に寄せる関心は強い。昭和61年には八木沢団地婦人防火クラブ、長沢防火クラブなど36クラブ（6千320人）が組織され、県下でも有数の防火クラブだった。

写真1　「宮古市婦人防火クラブ」の訓練風景

**白鳥定良宮古消防署長**（昭和32年生）に2015年9月2日に伺った話によれば、婦人消防協力隊は消防団への協力団体で、分団活動のバックアップをする組織であり、○○分団婦人協力隊という形になっているという。一方、婦人防火クラブは町内会の組織で、家や町内から火事を出さないようにという目的でできた組織なので、設立時からの主旨が異なっている。女性消防団員の状況については、女性消防団員も居住地域の分団に入る。消防団員の着るユニフォームの種類は男女共に甲種制服という表彰式などの儀礼服と、乙種は半纏が制服で、その他にも活動服があり、火災時には防火衣を着るという。

## 1　婦人防火クラブ

### ①　重茂婦人防火クラブ

写真２　宮古市婦人防火クラブ連合会会長として訓練に参加している盛合敏子さん

**盛合敏子さん**（１９５３年生、宮古市重茂）２０１５年８月23日に話を伺った。

盛合さんは現在、宮古市婦人防火クラブ連合会会長であり、重茂漁協婦人部元村防火クラブ会長、重茂漁協婦人部長、岩手県漁協女性部連絡協議会会長、全国漁協女性部連絡協議会副会長の職にあるため忙しい。

**重茂の婦人防火クラブ**

重茂の婦人防火クラブは重茂漁協婦人部が中心でできた。当時の消防団長の北村さんが盛岡で防火クラブができたので、宮古でも誕生をという話になり、先ず地域的にもまとまった活動をしている重茂の漁協婦人部に話があった。重茂地区は漁業が生業であり、夫などが海に出ているときに女性達が地域を守っていると言うことだったようだが、後日、重茂は女性も口開けの日などには出漁するとわかったとのこと。

しかし、女性も火災等から地域を守らなければとの意識で結成されたことを当時の婦人部長さんからお聞きした。

婦人防火クラブとしての活動は宮古市婦人防火クラブ連合会の活動に準じており、「家庭から火を出さないように」を基本とし、春期・秋期の防火広報、防火パレード、宮古市消防団大演習への参加（応急救護訓練）、宮古市消防訓練への参加（炊き出し）、火災警報器や消火器の設置促進、消火訓練、視察研修など多岐にわたる活動になっている。

**平成23年3月11日**

震災当時、私は県・沿岸広域振興局宮古センターの非常勤職員でした。その日は市内の県立病院での健康診断の日でした。午後に事務所に戻り、間もなくした頃、午後２時20分に地震があり、いつもと違う地震だと感じました。

そして、午後２時46分にさらに大きな地震があり、津波が発生するとの防災無線が繰り返し放送されました。職場は３階建てで海岸より離れていましたが、山手の方に避難するようにとの指示がありました。津波は市の中心部まで到達していました。重茂にいる家族が心配で携帯電話を何度も手にしましたが通じませんでした。公衆電話も通じませんでした。後で聞いた話では、重茂の自宅には家族や親戚が集まり「敏子はもしかしたら…津波に…」との話が出たとのことでした。

私は家に帰ることもできず、家族などの心配もあり心穏やかではありませんでした。宮古センターは当時の局長の指導により避難所となり４００人を超える人々が避難して来ていました。局長の指示により避難した皆さんに炊き出しをすることになりました。これまで私は有事に備えての炊き出しの訓練や地域での活動の中で経験をしていたので、緊急時のおにぎりの作り方を指導しました。また食料品も限られた数になることから、人数相当に分けることなども指導しました。

非常時や緊急時には経験や訓練を理解した人が指示をしないと収集がつかないと思われます。11日は眠ることができないままセンターで夜を明かしました。

**3月12日**

昼過ぎに浄土ヶ浜パークホテルで働いている息子が私を探しにセンターに来ました。職場からの国道は通行不能のため、田代からの山道を来たとのことでした。お互いの無事に安堵。息子は私の無事を確認し、「職場に戻るが、また来るから動かないように」と職場に戻りました。

一方、夫は軽トラックで重茂から山道を通り赤前に抜け、また山道を走りセンターに来てくれました。生きているかどうかと心中不安の中を来た夫は、私が炊き出しの采配をしているのを見て、腰が砕けたとのことでした。息子の職場まで行ってくると出て行くと間もなく、

入れ替わりに息子が来たので、私は息子の車で市内から花輪を抜け、津軽石、赤前、堀内とやっと通れるほどの山道を抜けて、薄暗くなる頃に重茂につきました。

自宅に帰る途中に重茂の避難所となっていた交流センターがありましたので、車から降ろしてもらいました。私を見た自治会役員のMさんは「よく帰ってきてくれた。待っていた」と声をかけてくれました。Mさんは「里地区は大きな被害が出た。昨日と今日と地区内の人たちが何とか炊き出しをしたが限界にきている」とのことでした。「私はそのために帰ってきました」とMさんに話しました。

家族や親戚も私や息子の無事な姿を見て安堵。私と息子も孫（子）や嫁（妻）、私の親戚の無事な姿を見て安堵。早速女性部員や地域の人たちに炊き出しの手伝いの声かけをしました。70人の方が集まり、6班のグループに分け、1日交替で避難所の炊き出しなどを行うことにしました。

**3月13日から**

私は毎日、朝5時に避難所に行き、御飯のスイッチを入れ、地域の皆さんの支援等の材料で献立を考えました。避難所には発電機もあり電気も点き、プロパンガスもあり、水道も出ました。そして食材も送られてくるようになりました。また衣料品などの支援物資も送られてくるようになり、その配布等も行いました.

支援物資の配布は避難者がそろったところで行うこと。順番は公平に番号札を作り「くじ」と決めました。時には「じゃんけん」の時もありましたし、「自由に」の時もありました。

避難所では日が過ぎてゆくごとにいろいろなことがあります。

ある日、「プライバシーが保たれないので、パーテーションがほしい」と私に申し出た方がいました。私は「それは皆さんで決めて、皆さんの意見として市に申し出てください」と話しました。避難所はあくまで避難している人たちが話し合いなどをして運営してゆくのがよいと思います。

後日パーテーション（仕切り）は設置されましたが、それにより距離感が出たと寂しそうにお話しする人もいました。

2週間くらいたった頃になると炊き出しの手伝いをする側にも、避難をしている方にも自由と言った様子が多々見受けられます。

そこで3月27日で女性部や地域の皆さんの炊き出しは終了とし、その後は避難所の皆さんに任せることにしました。

その後は重茂小学校の体育館をお借りし、全国の皆さんから送られてきたので支援物資の仕分けと配布を5月8日まで行いました。

**重茂漁協婦人部**

現在、女性部員は289名で、平均年齢は57歳です。20代、30代の部員もいて、女性団体としては若い方だとおもいます。

当女性部を運営する本部役員10名、支部役員25名の合計35名が活動の中心となり、数多くの活動に取り組んでいます。

とくに大切な海を守る「石けん使用運動」は40年にもわたる実績活動として全国的にも高く評価されており、平成28年3月1日に開催された全漁連主催の「平成27年度　青年、女性漁業者交流大会」において水産庁長官賞を受賞しました。

現在、漁業者は就業者の高齢化や担い手不足などの問題を抱えていますが、「元気な浜には元気な女がいる」を心に留め、活動に励みたいと思います。

**②　津軽石婦人防火クラブ**

**中島光子さん**（昭和18年生）に鍬ヶ崎の学童（保育）施設で2015年9月4日に話を伺った。

**津波とその後**

田老の公民館で学童をやっていたときに津波に遭った。津波は川を伝ってくるが、山の向こう側から津波が見えた。口を開いてやって来た。田老の総合事務所で1晩待機し、翌日田老では三鉄の線路を歩き、宮古からは45号線を歩いて津軽石まで帰った。途中で自衛隊が来たので、

その車に向かって手を合わせて「頼む」と言った。津軽石小学校に家族が避難していて、そこでほっとして涙が出た。

その翌日から炊き出しに出た。災害時は緊張をして笑顔が出ないので、これではだめだと思い、一緒にやる人たちに絶対にめそめそせず、笑え、緊張するなと言った。こうして食べ物を調理する人たちがゆったりしていたので、他の人たちから助かったと言われた。

津軽石では全世帯が防火クラブ員なので、食事、掃除もすべて会員たちでできたので、文句は出なかった。老人が多く、3日に1回は救急車が来たため、命の大切さは感じた。

こうして10日間炊き出しをした。その後自衛隊が来て交代した。津軽石では山の手の人たちは流されず、炊き出しができた。山の手の人たちが米、野菜などを持ち寄ってくれた。津軽石より上の根井沢やその奥は被害がなかった。3月12日からは商店から冷蔵庫が使えなくなったと言って、魚、野菜、のりなどが届いた。元自衛隊の盛合さんが指示を出したり、すべて指導をしてくれた。炊き出しは防火クラブ員が中心に行った。給食センターができてからは津軽石小学校の給食室を使っていなかったので、そこにあった大きな鍋や釜もそのまま使うことができた。魚汁や煮付けなども出せたので、津軽石の人たちはほっとする部分があったと思う。きんぴらなども作ってもらえて幸せだった。避難所は体育館だったので、大変だったが、お腹は幸せだった。

3日後からボランティアが入ってきて話を聞いていた。しかし当事者はまだしゃべりたくない人もいるので、「来るな」と言いたかった。自衛隊や看護師は何でも聞いてくれるし、個別に話を聞いてくれた。そしてビタミン剤などをくれて、これで元気になると言ってくれたので、本当に落ち着いた。ボランティアは皆が落ち着いてから来てほしかった。

炊き出しの期間中、自分の家の片付けが始まった。1階はすべてだめになったので、家族はそちらにかかったが、クラブの仕事をするようにと理解してもらえて、炊き出しを続けることができた。

大震災後は「公助、共助、互助」ではなく「共助」という事を実感した。隣同士のつながりが大事だということに関心を持つことができた。つながりを大事にすることに実感が持てた。公助は助けてくれなかった。市役所より人が来ないのでだめだと思う。お互いの助け合いが大切だと、皆が実感したことがよかったことだと思える。

**防火クラブ**

防火クラブは地域ごとにある。本来は会員制で、年会費を払うのだが、津軽石では年に6万円の助成が毎年津軽石消防団から出るので、会費は取らない。全世帯が会員なので気を遣うことなく、皆でできた。防火クラブは消防団より全国的に誕生しているという話があり、各地でできている。宮古市婦人防火クラブ連合会では、津波前に40周年記念のイベントが行われた。クラブの本質は自分の家から火を出さないということ。津軽石の防火クラブは消防団と結びつきが強く、何かあると呼ばれる。災害や大火の時などは、団員が出払っているとまず炊き出しをやる。各地区で年に1回訓練をやる。津軽石では防火講習会、救急訓練をやっている。

宮古全体では防火クラブの活動は盛んではない。休会や休部が6か所くらいある。消火訓練をしたいと消防署に相談をした。消火器を提供するのでどうぞと言ってくれる業者もいるが、きちんとやっているところは少ない。

公式行事には防火クラブの半纏を着て帽子を被って行進をする。訓練にも半纏で出る。半纏を着ることは誇りに思う。普通の会員の半纏は消防団に備品としておいてあるが、会長と副会長の半纏は何かあった時にはいつでも出られるように家においてある。県の連合会にも半纏で出る。何か行事があると、各地区に地区委員がいるので彼女たちが出る。30地区ほどあるので、30人が出席する。

当クラブでは、年間計画は防災、救急、消火訓練などの講習会が3回、役員会が3回、総会が1回ある。

新里は消防協力隊で、火を消すことが目的なので、元々防火クラブとは違う。消防団と消防協力隊は同じ系列だが、防火クラブは別のもの。

**津軽石白鳥少年少女消防クラブ**

津軽石には「白鳥少年少女消防クラブ」があり、子供用の半纏もあり、初午などには消防訓練やお手伝いもやる。小学校4～6年生が対象で、現在30人いるが、今の子どもたちは野球などで忙しく参加が難しい。子供たちも何回か表彰を受けている。成立は婦人防火クラブと同じ頃になる。子供たちには11月頃になると防火ポスターを描かせて、家の近くに貼ってもらう。こうした活動に子供会では現金を渡すところもあるが、私たちは図書カードを渡している。また消防署にポスターの展示をお願いしている。2年に1回くらい子供たちを連れて県の消防学校へ行き、ホースを持つ等の訓練と視察を実施している。

**学童について**

生まれは田老の川向で、津軽石に嫁いだ。公立保育所で38年間努め、退職後は社協や児童相談所で働き、その後はシルバーの会員として田老の学童に努めていたときに津波に遭った。今は鍬ヶ崎の学童に来て5年目になる。学童にはきちんとした人材が必要だと思う。学童の管轄は文部科学省ではなく、厚生労働省になっている。安全保障という点では予算が付いていない。午後の4時間だけなのでボランティアで良いという考えでは危険だと思う。子供の安全を守るためにはきちんとした予算を確保する必要がある。学童が新たにできると委託先を募集するが、安いところに決まるから、シルバーになってしまう。こういう所に来るのは校長経験者などで、金はいらないと言うため、予算が付かない。このままでは子供の安全が確保できない。

私自身は保育園で働いたことが力になっている。若い先生は遊び方も知らない。短大卒で来るが、何もできないので、彼女らの指導が力になる。またお母さんたちとしゃべったりできてよかった。保育園に勤めていた頃はすべて子供たちのためだ、殺されても死なないでがんばれと言った。子供たちには自ら死を選ばないように運動をさせた。体力が付くと気力も付けられる。山へ行ったりして、鳥の声、山の実などを知れば生きる力になる。私自身は貧乏だったからよかったが、心が貧しくなることがある。しかしこうやって生きてきた。

**2　婦人消防協力隊**

**佐々木則子さん**（昭和27年生、盛岡市出身）２０１３年8月8日に話を伺った。

昭和63年3月から川内に住んでおり、震災後婦人消防協力隊の隊長をしている。この組織は昭和42年頃からあると80歳代の人たちに聞いた。昔は人数も多かったらしく、いろいろと活動していたという。宮古に合併後は向こうの行事に合わせている。

火事があると1時間以内に4、5升のおにぎりができる。「まずはスイッチ」というのが姑さんたちの行動のパターンになっている。川内に住んでいるが、ここに来てから火事が3件あったが、すぐに炊き出しに出た。これが大震災の時の行動の前の地盤にあった。

**震災当日から**

最も早く動いたのは川井地区の道の駅のビーフビレッジともうもう亭で、その日の夜から動き始めていた。我々は翌日の朝からだった。メンバーは自治会と婦人会と婦人消防協力隊も一緒だった。電話は通じず、知らせは徒歩だった。公民館と集会所に3升釜が2つある。水道はこの2か所のみ。水は豊富に使えたので、給食センターが動き出す4日目の朝まで炊き出しを続けた。自治会の活動は休眠状態だったが、後で自治会が払うからと、お店から米を持ってきた。川井地域の名前の入った段ボール箱入りのおにぎりが多かった。ガスはファーストフード店のものしか使えなかったという。おにぎりはパックに入れて運んだが、ゴミになると言われ、ラップに包んだが、なくなってしまい、アルミに代えたが、臭いがすると言われ、またラップに代えた。毎回段ボール2箱くらい持って行った。

ここの地域には石清水があり、薪ストーブもあるので、自分たちの食事は問題なかった。炊き出しにはガス釜で炊いた。携帯も使えないので、隣に用があっても歩いた。「火事の時の炊き出し」という下地があったから、すぐにできた。公民館も職員がすぐに鍵を開けてくれた。

火事があると、米とあるものを持って屯所に集まる。何も言わずとも誰が何をやっても助ける。停電でも車のライトを照らして炊き出しをしたこともある。震災当時は皆夢中でやらなければだめだったと言っていた。隊長が声をかけなくても、いざという時には来てくれる。5日目に支援米が来て、新里の給食センターも動きだし、炊き出しはもう良いと言われた。おにぎりができてもガソリンがないため、川井総合事務所から取りに来てもらった。4日目の朝までお店のものをすべて使い切り、いよいよ何も無くなって、盛岡まで白米を買いに行ったが、10キロきり買えなかった。

支援米がトラックで新里の体育館に着いた。最初は支援物資としては水が最もほしいと言われた。支援物資が届くまでは水や飲み物がほしいと言われ、ペットボトルに入れて持って行った。

3日休んで郷土食を売りに出したら、盛岡方面から被災地に持ってゆきたいと、ものすごく売れた。米があってもガス、電気が通じないので、すぐに食べられるものを買いに来た。震災のおかげで儲かったようでもうしわけない感じだったが、「助かった」と言われて、楽になった。今年の春あたりからだいぶ元に戻った。

タイマグラのキャンプ場にはバス3台分くらいの人が入っていたので、専門のコックさんだけでは足りず、近所の奥さんたちも助けに行った。朝食を作り、昼食を工事現場まで運び、夕食も作るので大変だったという。ここに泊まっていたのは関西の業者で工事関係の人たちだった。仮設住宅の工事だったらしく、大槌まで通っていた。被災者の何人かは仮設ができるまでは送り迎え付きで横沢冷泉まで行き、入浴と昼食の提供を受けていた。

消防協力隊は昔は全戸参加だった。今は個人で入っているが、火事になると皆出てくる。今はあまり活動をやっていないが、隊員としての自覚はある。防火には気をつける。訓練は村の演習で平成3、4年頃まで小隊訓練をやった。20人くらいで並んで小さいポンプの「軽可搬ポンプ」を動かす訓練をやったこともある。消防車を動かすことはない。

## 3　女性消防団員

2015年8月25日に**高田由美さん**（昭和37年生）から話を伺った。宮古市南町にて喫茶店アムールを経営されており、住所は中里団地だ。

**震災当日**

震災当日はアムールにいて、地震が大きくて自宅が気になり、山を越えて戻った。高校生の息子が釣りに行くと言っていたので心配したが、その日は行く気にならなかったと言って家にいたので、家族も自宅も無事とわかり、一安心して、自分の活動ができた。女だとそれが一番気にかかる。愛宕小学校の子供たちが集会所にいたので、その面倒を見てから消防署に行った。

町の中では水がしんしんと出ていたが、それが津波とは思わず、水道管の破裂かと思った。逃げてきた人たちを誘導していたとき、近くの病院の人が車いすを貸してくれて、早く移動できたので助かった。突然の出来事で動けなくなる人も結構いた。女だと声をかけやすく、おばあちゃんに声をかけると、「手を貸して」と言ってくれた。経験してはじめてわかることがある。消防の半纏を着ていると安心してもらえる。男たちの声だとちょっと恐い感じもあるので、女が居ても良いなと思った。女がいっぱいいたら、もっと連携してできると思った。いざとなっても女は肝がすわって強いし、女の方が器用だと思う。手を貸してあげるのも、女なら男女共にやってもらいやすい。

**震災と女性消防団**

震災前に女は私だけで、出しゃばってはいけない、男の世界だからと、火災が起きても行かなかった。消防団に入ったときは直接団本部付きになり、分団の経験がなかったので、受付をやったりして、現場の経験がなかった。

震災の時は炊き出しをやらせてもらった。料理が多少できるので、これをやろうと思った。一般の人ではなく、消防署員や分団の人が食べずに働いていて、気持ちが参ってしまうと思った。彼らを食べさせる立場にいたので、署長、団長も好きにやらせてくれた。応援の人もカップ

写真３　訓練中の女性消防団員　高田由美さん

ラーメンで済ませるつもりらしかったが、温かい御飯と味噌汁くらいだったが、気持ちの上ではずいぶん違ったようだった。自分でも現場の人たちと一緒になって、前に立って人を助ける場にいられたと思えた。今思えばもっとうまくできたのではないかと思うこともあるが、当時は精一杯だった。また、自分の消防人生の中で大きな出来事だった。消防団に入っていたからこそ、直接消防署に行ってできたことだし、消防署員の人たちとのつながりも持てた。

震災後、火災や災害が起きても、何かやれるかもしれないと思えるようになったし、行ってみれば何でもできるし、声をかけることもできるようになった。これ以降、誰かを助けようと手を出したとき、「大丈夫です」とさしのべた手を断られると、恥ずかしいという思いではなく、それはよかったと思えるようになった。明日ではなく、今やらないと後悔すると思えるようになった。

１か月間、朝５時から多いときで１日１００食作っていた。魚菜市場の婦人会の人たちが手伝うからと言ってくれて、野菜も流されたと思えば何でもないと、どんどん出してくれた。それがなかったら、物がないので大変だった。消防署の食堂に行くと「切なかった」と涙が出る。署員が疲れてドロドロになって帰ってくるが、食べてお腹がいっぱいになると笑顔が出て、「じゃまた行ってくるか」と出て行く。体力的には眠れないし、１か月で８キロやせた。自分が食べることを忘れて、食べさせなきゃという思いが強かった。働いている人は家もあるのに、誰かがやらねばと言う気持ちでやっている彼らを見るのはしんどかった。署員の人たちがつらい思いをしているのを見るのは大変だったが、食べて、笑顔が少しでも見えて、「がんばっぺ」と思えた。震災直後は皆が声を掛け合って優しいなと思えたが、１か月経つと違ってきた。でも皆やさしかった。優しい人がほとんどだった。

**震災を経験して**

人生観が変わった。昔より今の方が自分を好きだと思えるし、人のことも好きになれる。昔は人のあらを探したり、そうはいっても自分の方がつらいんだよと思っていた。今は自分が元気だし、あなたと会えて元気になったと言ってもらえるのが好き。考えていることはあるのに、表現をすることが下手で、でもとりあえずこういうことがやりたいとか言えるようになった。

火事場でも「手伝います」と言える。見物人の中には子供も女の人もいるので、彼らのそばに行って声をかけられる。黙っていられなくなったが、活動することで自分が元気になれる。自分の中のはつらつさは自分で盛り立てないとだめになる。奮い立たせる何かがある。消防団員は皆の一歩前で役に立てる立場にあるので、それをやれるし、「半纏を着ているのだから、私を頼りにして」と言える。

消防団に顔を出すようになり、団員として認めてくれるようになった。やっと仲間にしてもらえたと思える。実際に女の人を増やせと言われるが、家を放ってはおけないのでむずかしい。女の仕事は一生限りないので難しい。女性団員の仕事をどこでやれば良いのか、次の世代の人たちのためにどうしたら良いのかがわからない。しかし女がいた方が良いということはやってみてわかったことなので、どのように興味を持ってもらえるかが今後の課題だ。

**消防団に入団**

平成13年に入団して15年目になる。ボランティアには興味があった。今の団長が母の同級生で、声をかけてくれた。「女だっていいべ、これ

からの時代だから、女がやってもいいんだ」と言ってもらえた。火事を消そうとまでは考えなかったが、女ができることがあるかもしれないと思えた。「何かやりたいけど、何をやっていいかわからない」という人には消防団があるよと言いたい。家の人に言われてやめた人もいるし、だからこそ入ったという人もいる。火事、震災、警報、大雨でも出ないといけないので、思ったより大変だが、自分たちで守っているという感覚になれる。私は絶対に入ってよかった。何かやりたいけどできなくて、親戚の家で手伝うくらいきりできなかった。大変だが、やっていなかったらもっと後悔する。人のために手助けができると実感できるし、力になる。話すことでまた一からという気持ちになれる。自分を活性化する力になった。

入った当時は、演習の受付、懇親会の世話係ばかりで、当然そうなると思っていた。演習の時はこうなるんだと勉強した。火事現場ではこうなるとわかる。震災後2年目に消防学校の2日間の研修に行くと決まったとき、最初はとてもいやだった。時間に追われて一日中勉強するという事が不安だったが、勉強してよかったと思えた。自分で覚えたいと思うと覚えられる。火災にも行けるようになっていたので、煙が出た際などの研修もあって勉強になった。現場に行って見ているので、もっと勉強したい。周りを見て聞く、話すという当たり前のことが当たり前でなくなったのが震災だった。目の前に出てくる食事が当たり前ではないという事は、震災がなければ感じることはできなかったので、感謝されるより、感謝できる自分がいいし、ありがたい。自分が元気でないと人にやさしくできない。震災で亡くなった人たちのパワーを頂いて、私は元気でいられる。私があこがれられる人間になってゆきたい。

疲れ切っていたときも家族はやめろとは言わなかった。いい加減にしたらとか、誰かに変わってもらったら、と言われると思ったが、そうした言葉は一言もなく、がんばれと言ってもらえた。家族の協力がなくてはできないので感謝している。家族も仕方がないとあきらめなくてはいけない。「行かねばねんだあ」という団員の気持ちを理解できているのは家族だと思う。

消防団の大切さは震災で一段と理解された。普段は飲んでばかりだと言われていたが、震災を経てやるときはやるんだ、かっこよいと言われるようになった。私もかっこよくなりたい。不眠不休で過酷だったと思う。でもそういう場で人を助けることができて、今も声をかけてもらえて、つきあいも続いている。4、5日で交代するが、その間のことが濃い。市長も泊まり込みで出ていたが、「あの震災で太ったと言われるのはお前のせいだ」と今も笑ってくれる。胃袋をつかむのは強い。女の強さであり、特権だと思う。震災時はとくにそうだった。人を助けるためには、食べて体力をつけないと！と感じた。

ユニフォームは黒地に赤の入った半纏で、これは乙種制服になる。団としての出動の際に着る。甲種制服はがっちりとした警察官のような服で、スカートにパンプスを履く。この服装で女性大会にも出る。毎年全国女性活性化大会があり、4年前には秋田大会で震災の経験談を発表した。

**妹さんの発言**

震災の時にはやれることはやってもらいたかった。他の人もやっていたし、自分たちも自分の立場でやっていたし、やれる場がある人はそこでやればいい。何か手伝いたい人はいっぱいいた。

## 4　保健師

**湯澤睦子さん**（昭和31年生、保健師、生まれは川井、嫁ぎ先は小国、宮古市川井保健センター所長）２０１３年８月22日に話を伺った。

**震災当日から**

当日は区界を超えて戻ったとき、職員は恐れで皆外に出ていた。声をかけると皆さんすぐに動いてくれた。保健センターで炊き出しを行った。小国や川内には何かあるときに炊き出しを行う習慣があった。何かあると川内の婦人会、消防協力隊が行う。センターにある水、食糧と、近くのコンビニのパン、カップラーメンの買い出しを職員が行った。

自主的に後方支援を考えた。栄養士、事務職員が行った。炊き出しの準備にはセンターの用具を使った。市からの要請がある前に、自分たちが集会所や公民館の釜や自分の家の釜を持ち寄り、ここで炊き出しを始めた。給食センターがあったが、そこまで考えが及ばず、ここで始めた。

最初は持ち寄りでおにぎりには海苔を巻いたり梅干しを入れていたが、そのうち何もなくなって塩のみになった。各家では精米をしていない籾米は持っていたが、停電のため、自家発電のある家まで持ち込み、精米してもらった。これらは寄附として扱われた。

応援要請は市の本部長から来た。8千個の要請だった。そのため暗くなってから公社でも炊き出しを始めたが間に合わず、ここで終わってから公社に女子職員を連れて行ってやったが、それでも間に合わず、センターでもやったが、まだ間に合わない。

そのため川井の婦人消防協力隊に依頼し、一緒にやった。終わったのは2時頃だった。その頃、職員が何も食べていなかったといって、コンビニを開けられないかと車で来たので、ある分だけ炊いて持たせた。

シミュレーションはなかったが、男たちは外へ出てしまうので、私たちは食糧、水の確保が必要だった。ここにはかつて日赤があり、水用のタンクがあったので、そこに水を確保した。

これまでの経験では、山火事があったとき、女子職員はおにぎりを握らされた。小国ではどの家でおにぎりを握るということが決まっていた。何かあったらこの家に行くようにと言われていた。

今回は次の日の要請もあり、8千個と言われていた。ここだけでは無理だったので、朝一番に地域の人に声をかけようということになり、栄養士と2人で廻ってもらった。婦人会、ボランティアの会の代表など、地域のリーダーになれる人に依頼して廻った。協力者1人に声をかけると、皆さんすぐに動いてくれた。その人からまた声かけが広がり、皆が協力してくれた。婦人会は解散していたが、昔の名簿を見て、元の会長宅を廻った。地区の人たちも情報が無く、何をして良いかわからなかったという。ここには6行政区、40小集落あるが、それぞれの集会所単位でおにぎりを握ってもらった。1日に午前と午後の2回、総合事務所にすべてを集め、宮古市長町にある水道事業所に持って行った。

新里では婦人消防協力隊の隊長が声かけをしたという。ここには食生活改善推進協議会（通称食改）という組織があり、彼らと震災について後になって話し合ったところ、炊き出しをした地域としなかった地域があったという。地区のリーダーとなる人が必要だと言い合った。

川井ではどこで孤立するかわからない。電気がなければ薪でご飯が炊けるし、暖もとれる。米も干物もあるので、飢えない。家では年寄りを置いて出てきていたが、優雅にご飯を炊いて食べていた。卵がないから買いに行ったらなかったと言っていた。水は今はほとんど水道なので、落差がないところでは長く停電が続くと水が出なくなると触れて廻った。門馬では水がなくなりそうになり、運んだというが、その他は問題がなかった。ラジオがない家もあり、情報が全くないところもあった。

3日目くらいでここの役目は終わり、その後は新里の給食センターで引き継いだ。その後、ここの職員は包括支援センターなどで活動をした。栄養士は炊き出しの支援に、保健福祉関係者は市役所の保健福祉部に集合し、避難所の巡回に廻った。

私は田老第一小学校、永田さんは田老の常運寺に詰めた。毛布、歯ブラシなどの在庫はすべて出した。車いすなども持って行った。血圧計などは持参したが、薬までは頭が回らなかった。川井には薬屋が1軒あったが、後で薬を持ってこいと役所に言われてから気がついた。薬は流れたものを洗って使った。血糖値を測る器具もなかった。

田老第一小学校では体育館に集まっていた。田老の人たちが炊き出しをしていた。初日は2人で1個、2日目からは1人1個食べられた。食事はおにぎりとペットが出た。高齢者はおにぎりを食べられないので、栄養士が鍋を借りてきて柔らかくして出した。トイレは水洗ではないので良かったが、何日もたつとたまってしまい、これ以降どうす

るかという事になり、校庭に穴を掘るしかないと校長が言った。しかし小学校ではそこまではしないで済んだ。水洗の所では溜めてから流すようにした。トイレが最も問題だった。女性はナプキンがなくて大変だった。2日目に公民館にいた人に聞かれ、戻って取ってきた。

診療所の黒田先生の指示で、トリアージといって、色別のテープを詰めた。薬手帳もなく、聞き取りをしながら薬リストを作った。透析患者は消防団や中学生が線路の上を担いで行き、道路まで出て救急車に運んだ。

田老では避難所にいて、2泊3日の行程を3月末までやった。その後は巡回で各避難所を廻った。ここは看護師、栄養士など本来は4人が常駐していたが、4月になってからは所長のみが常駐となり、4月末に全員がここに戻ってきた。

川井に避難している方もいた。実家とか、娘の家など、親戚を頼ってきたという。大概1年以内に戻った。山田、釜石からの人もいて、介護サービスも利用していた。田老診療所に入院していた人が、特養の心生園に家族と一緒にバスで来ていた人が12人いた。診療所にも3人入院し、家族も付き添ってきていた。こちらに来た12人は黒田先生がトリアージで決めた。彼らの食糧は行政支援があった。

私の資格は保健師なので、住民の健康管理などの危機管理について主に担当をした。停電したときの在宅老人や、携帯用酸素ボンベは最大8時間までなので、大雪の際はギリギリで診療所に入院させた。こちらで被害があれば対応できない。

ここには社協のヘルパーがおり、どこにどういった高齢者がいるか把握している。関わりのある人の優先順位を決めておく。医療品の管理リストは必要だと実感した。医師は3日分しか出せないと言っていた。統合失調症の人がいて、かかりつけ医が岩手医大だったので、1日1回きり薬が出ず、ギリギリのところでバスが通じたので、盛岡まで行けた。

川井には医療機関は1か所のみだ。これまであった大きな災害はアイオン台風だったが、被害の大きさは伝承されていない。「災害時対応の保健活動」というマニュアルがあり、その中に「精神の対応」という項目があって、個人の記録の取り方などが書かれているので、それら思いついたものを鞄の中に入れたが、役に立たなかった。

田老第一小学校の養護教員は女の先生で、記録を取っていた。災害対策本部には、日々の診療記録をメモとして提出した。保健師関連の記録は健康課にあるのではないか。

3日目には誰がどこの避難所へ行くようにとの指示が出たが、田老の情報が無かった。保健師が2人いたので、避難所を廻ってほしいと言われたらしいが、2人とも常運寺の避難所で手一杯だった。診療所には医療の必要な人がいっぱいいた。田老には避難所が6か所くらいあったので、そこを廻った。田老を見て泊まり込むことにした。被災者と同じように毛布1枚で寝た。石油ストーブもあった。寺では太いろうそくを廊下に点けていた。

公用車に油を入れて保健センターに持ってこいと指示され、川井のすべての車を持って行った。

**おわりに**

岩手県では古くから⑴婦人防火クラブ、⑵婦人消防協力隊があり、比較的新たに立ち上がった⑶女性消防団員などがあり、震災時にはそれぞれの場所で活動を続けてきた。それぞれの立場と地域で活躍した女性たちを見てゆくと、婦人消防協力隊は消防団への協力団体で、消防団の分団活動のバックアップをする組織で、○○分団婦人協力隊という形になっている。一方婦人防火クラブは町内会の組織で、家や町内から火事を出さないようにという目的でできた組織でそれぞれ設立時からの主旨が異なっている。女性消防団員も居住地域の分団に入る。

自分が被災者であるにもかかわらず、連日現場に出て炊き出しをしていたのがここに述べた女性たちだった。その組織力と行動力には頭が下がる思いだが、現状では後方支援という男たちの活動を背後で支える組織ということが共通項のように思える。今後地域社会の過疎化が進み、後方支援とは言っていられない状況になりつつある今、彼女

たちの行動にどんな変化が見られるのか、注目してゆきたい。

**【引用文献】**

㈶岩手県消防協会監修「いわて消防物語－纏に生きる人たち－」「いわて消防物語」刊行委員会　１９８６年